

○國民學校低學

年ミカズ

(ツツキ)

鹽野「それは言葉でせうね。七の次は何か、あこはいくつか言つても判らないでせう。つまりいろはを覚えるやうなもので。」

倉橋「ではその言葉ミいふか、觀念の裏ミいふかそれを相手にせずですか」

鹽野「相手にせずですわ。」

倉橋「では、抽象數へやがては行くのだから、この豫めもつてゐるものを馬鹿にしないでそれをもミにして具體數へく

つつけるやうにすることは如何でせう。」

鹽野「それは結構です。が都會の子きも田舎の子きもは先にミの位數ミして知つてゐるかの點ちがふでせうね。」

山村「數を直觀してゐる子きも對してはさう扱つたらよろしいでせう。」

鹽野「さういふ子きもは先へ進めればよいでせう。一本、一匹ミいふやうに呼び方を教へてやるミいふ風に。」

○量ミ數

倉橋「量の方が先でせうか數の方が先でせうか、國民學校の教科書では數の方が先のやうですが。」

鹽野「數ミ量の關係ですが、數ミいふのは量の一つの現し方だミ私は思ひます。つまり先にも言つた同體異相で觀點の相違でせう、數ミなるミ或時間的經過を要します。」

倉橋「むづかしいミになります。が、實際家ミしては量經驗をさせるミをしながら、量の方をミにした事即す時は量を離れないわけですが、量の方をミにした事もあります。量の方は觀念でなく全然心理經驗です、いく房入つてゐるか知らないが大きなみかんでいゝではないかミ思ふ。」

鹽野「カズノホン以前に量の經驗はしてゐる、それをミり上げる。數だけを中心にしてはいけませんでせう。」

倉橋「一つのお煎餅を二つにわつて數へてごらんさいへば一つ二つといふがきつちを上げようといへば量である。それで量が先でせうか數が先でせうか。教科書では同じ形の蝶、花、ミ揃つてゐますが、幼稚園では數へる方より量經驗を深めるといふ方がいゝのではないかと思ひますが。」

鹽野「それは大變結構だと思ひます。カズノホンには量も入つてゐるがまあ數です。」

倉橋「幼稚園では量の方を主にしたらいいのではないでせうか。」

鹽野「さうですね。幼稚園では數、數といはずにそんなことからしたらいいでせう。」

倉橋「今の幼稚園は憶病でして、過ぎざらんことを之れ憂ふといふ風なのです。昔風の徒に過ぎた誤は是正されましたが、ごこまでで過ぎないか、そこを伺ひ度いので、量の方は、いくらしてもいいでせうか。」

鹽野「それはよいでせう。重さとか大きさとか——」

倉橋「何処にいへば過ぎるのでね。量經驗をうんごすれば國民學校へ行つて幸でせうか。」

鹽野「それは幸です。」

坂内「量はほんやり大小さいふのですがそこに數が加はるごはつきりして來ると思ふのですが」

倉橋「ごうも量ではあいまいだ、數にしなければ判らんぢやないかと言はれますが、數にしても判らんぢやないかといふごもありませんね。」

鹽野「それは一々測るより較べた方がいゝ(鉛筆とナイフを取り長さを比較し乍ら)」

倉橋「數に重きをおいて考へるご何だか數にしないご判らないのですが、量をもごにすれば量の正確さもあるでせう。」

鹽野「國民學校は道の修鍊だといふので、その成績はごう點をつけるか、八點、九點、ごすれば優秀ははつきりしますが點ごは何を基準にしてつけるかです。それより優良、可、位の方がいゝと思ふ。」

坂内「量がはつきりするごいふのはやはり數にしなけれは——」

倉橋「量を量ごしてはつきりさせるのではないでせうか。何処、何分のちがひで言ふのではなく、一々測らないごはつきりしないごいふのは、數に明らかで量に不明瞭なのでせう。」

鹽野「如何にも物差で測定するのは正確の様ですが、必ずしも進んだ考へではない。ごいふのは速いのは飛行機だからご言つて飛行機でそのポストまでゆくごいふ人がないごいふ例もあります。場合々に則して適當なものが一番すぐれたものご申せませう。量は數を伴はなければごいふ

考へでなく、場合々々に則して適當にするべきでせうね。」

○抽象數のこゝ

倉橋「それでは數の方で、抽象數の方で、一年のうち、いつ頃からその抽象數へもつて行くのですか」

鹽野「數字はやゝ抽象數ですがそれは前に申しましたやうにわり合早い。が數字を數字ミ扱はず物に即してゆく。

が指さか、丸さかの數ミ數字を結びつけるのは一つの段階です。四は三に一を加へたものと言ふのは十月から出て來ます。」

倉橋「カズノホンに指一本に下に1ミ書いてある所以のものは指二本のミはちがふ、一本のは1だ、さかう解釋していゝでせうか。」

鹽野「それはそこまで色々經驗してゐるので、或程度でこれも一本二本、一冊二冊の經驗で——」

倉橋「何だか、指ミしては一本だが、これはたゞ一本ではない、本でも數でもこの數になる、ミゆくのですね、そこで幼稚園ではミミで止めませうか。數へミもこくミ出度いミころを、表現する法を教へてもいゝでせうか。現にしてゐるのですが、いらないミミでせうか。」

鹽野「數を教へ様ミ意圖されないでもいゝでせう。實際を見せて置けば自然數へ來ます。」

倉橋「そこで順序は數で現すが經驗で、五日六日は順序であり、時計の三時さいふのは三ではないのですから、順序數の方が量に次ぐものではないかと思ふのですが。順序の經驗なしに數は判らないと思ひますが。」

鹽野「さうでせう。號令ミ同じで最後の呼び方で全體の數を現すのですから」

倉橋「幼稚園では數を順序で行くのは相當の處まで行つてもよいのでせうね。」

鹽野「それはいゝでせう。が數をミなへるだけは……」

倉橋「お題目はいけませんね。」

坂内「抽象にしなければ、實物を離れる事がなければいゝでせうね。數をはなれて生活出來ないと思ふのですが——」

鹽野「自然に出てくるものをミり上げる、用ひるのでいゝと思ひます。」

坂内「わざミ機會を作つてした方がいゝでせうか。」

鹽野「わざミしないでもいゝでせう。」

坂内「では數に關して經驗を繰返した方がいゝでせうか。」

倉橋「カズノホンの最初の頁に五つを豫想してゐられるが、五つの數經驗をこゝまでにさせておけさいふのでなくて、日本の國民學校一年生に入學する子さもは、四月の入學までに五ぐらゐるの所まで經驗出來てゐるを豫想してゐるだけでせうね。で、幼稚園ではこの豫想に達しない子さもは、何かしてやつてもそれはいゝでせうね。又量の方ではうんごやつても、又順序も或程度までやつてもよい、さいふ事になりますね。」

鹽野「幼稚園で數でも教へなければひまださいふのならば、さうでもないでせう——。」

須子「つまり物を離れないさいふのは實物ならよいさいふのでなく、子さもは生活をはなれないでさいふ意味でせう。」

倉橋「リンゴが澤山あつて、こゝでちやうさいゝから五さいふ事を経験させてやらうとする位はいゝでせうね。」

須子「グラフィさいふのは抽象的ですが、今日は出席十人なら四角を十だけ色つけて五人出席なら五つ色でそめるさいふ事をしますが、ある量を現すと思ふのですがこんなのはこゝでせうか。」

鹽野「長さ、量の判斷ですからいゝでせう。」

及川「カズノホンの七夕様の所で色紙を短冊をつくる、これは色紙の方は對角線に折つてつくるのでせうね。短冊の

方は四分の一に折るのでせう。」

倉橋「數の事は幼稚園では觀察の場合より手技に多く機會が出て來るのです。澤山花を描んだよ、必ず何本々々さいふのではありませんが、が、手技の時は量を澤山描くさいふ事は可能でなく、されだけ、又さの位のものをつくるかが必要になつてくるのです。」

鹽野「自然の觀察でもたゞ見るさいふやうな粗末なこゝではいけませんね。自然の中で、自然と共に遊ばせる、動物の飼育、植物の栽培で自ら見ずにはられないやうな風に觀察させる。そして一つは手技から處理するのです。」

倉橋「幼稚園では實にそれをやつてゐるのです。觀察は物の中さながらの中にある時より何か作るさいふ時にその働きが顯著になります。」

鹽野「動物が飼つてあれば餌をやる時、又花に水をやる時などにも數は出て來ませうね。」

倉橋「鉢に花を植ゑる時、又殊に朝顔の花が何輪さいたか、金魚が鉢に三匹ゐるさか、きんぐりを拾ふ時、こんな時ある程度まで數でそれに耐へなくなるを形容詞になつたり量になつたりします。この幼稚園に小鳥を澤山飼つてゐないのも深い意圖があるのでして……」(笑)

及川「この様なカズノホンで行つたら、今の幼稚園の子さもはきんないゝでせうね。」

倉橋「今まで幼稚園を小学校をこの様には考へられて
 るませんでした。考へられてゐないのをもつて幼稚園の姿
 だとして来た位でした。今まで幼稚園には大そうきち／＼
 とした考へで、天空茫莫の二極端があつた。これは幼稚園
 の方もいけなかつたのですが、言ふこゝを許していただく
 なら、小学校の方で、こゝからスタートするかが判らなかつた
 といふこゝもあつたらしいのです。」

けれども今このカズノホン一つつくるのでも大へんな研
 究に根據原理でされたのですから、これからはこれに、こゝ
 ぶ事ができます。伸び方にも充實といふ伸び方もあるので、
 今まで小学校と幼稚園は程度といふ重さばかりのつながり
 を言つたのですが、その前の充實さが我々の大事な役割に
 なつてくるわけで、敷についてはこゝまでだが物の經驗に
 ついては幼稚園に來た子もはぐん／＼やつて、太く、廣く
 充實させるといふのですね。これはどの教科についても。」

鹽野「つまり態度とか、その他についても、充實したこゝ
 ろが——。それが道の修練なのです。」

倉橋「野原へ出て幼稚園に來なかつた子もより來た
 子もがよりよく遊べるとか、蝶をみてもすぐ何蝶さかいは
 ずに數へるといふこゝでもなく、よく遊べるといふやう
 なこゝ——。幼稚園の先生は數學は出來ないけれど何だか
 宇宙の眞理をつかんでゐるといふやうなこゝがいゝのでせ

うな。」

鹽野「むづかしい學問はむしろ知らない方がいゝです。
 科學的に判斷してさうなきこゝいふ事は餘計なこゝですよ。」

倉橋「野生がよいのでなく野生的文化がよいのであり、
 無智がよいのでなく無智だから知らうとする態度がいゝの
 ですね。あゝ知らないよといふのでなく知らうとする態
 度。なまじ早く文化的文化へもつて行かなくてよいのです
 ね。」

鹽野「わからないから知らうといふその態度がいゝので
 すね。」

倉橋「今日は大へん長い間、色々大きな問題をお話してい
 たゞきまして有りが度うございました。我々實に斯う何だ
 か釋然しました。又機會を得てこの後も色々教へていた
 だき度いと思ひます。」 (完) (文責在記者)

× × × ×

× × × ×